

第六回 塩津能の會 九州公演

# 令和元年12月14日(土)午後1時30分開演 (12時30分開場)

# 大濠公園能樂堂

福岡県福岡市中央区大濠公園1番5号 TEL 092-715-2155  
<http://www.ohori-nougaku.jp>

【鑑賞券】

**正面特別指定席/10,000円  
正面(指定席)/7,000円  
脇正面(指定席)/5,000円  
中正面(指定席)/4,000円  
正面(自由席)/6,000円  
脇正面(自由席)/4,000円  
中正面(自由席)/3,000円**

#### 【電話予約・お問合せ】

## 塙津能の會事務局

**TEL/FAX:03-3330-6803**

### 【オンラインチケット申し込み】

<http://kita-noh.com/ticket>

(クレジットカード決済・コンビニ購入受取が可能です。)

[詳しくはこちらへ→](#)

主催：一般社団法人 塩津能の會



【会場案内】



能とは？

能じは舞（動き）と詔歌（セツコ）による舞台演劇です。しかし、現代の演劇の大半がドキュメントたり、つまり時間圧縮した物語であるのに対し、能は逆でドキュメントリー、衝撃的な一瞬の出来事を引き延ばしたもののです。一瞬とは人の出会い、別れ、生死などといい、これらの背景にあるさまざまな物語を、観る人それが心の中に描きます。「これ」によって能は自分が常で、それが難解と言われるところです。しかしこれこそが能の持つ魅力です。

## 九州(福岡) での喜多流の 歴史

大豪能樂堂を擁する福岡は喜多流にとって由縁の地です。流祖喜多七太夫長能が黒田藩の庇護を受けたことで開流に繋がりました。また明治維新の動乱期にも喜多流の大先達、梅津只圓が黒田藩のお抱え能楽師として困難を乗り越え、福岡の能楽の隆盛を築きあげました。大豪公園能樂堂の中庭にあるのは只圓翁の胸像です。この由縁の地福岡に、またひとつ能楽・喜多流の新しい火を燈すために、熊本ゆかりの能楽師塙津哲生・圭介が「塙津能の會」九州公演第六回目を催します。日本が世界に誇る伝統芸術、能楽の精神を、文化豊かに薫る福岡の地に拡げることを目指して活動に取り組んでまいります。

和風建築が減少し、畠の  
部屋がないという住まいも  
多く見られ正座といふ礼  
儀作法すら出来ない、知ら  
ない人達が増加している現  
状にはとても不安を感じま  
す。昨今文化発展向上の声  
はありながら、伝統文化の  
衰退が目につきます。能界  
の先人達も能の魅力を後世  
に伝えようと、明治維新の  
敗戦の窮屈時もひたすらに  
その道を全うして来られま  
した。喜多流の九州内での  
催しが激減した現状を何と  
か再興し、先人の思いを継  
ぎ伝えることが現代に生き  
る私達の使命だと思います。

第六回 塩津能の會 九州公演

番組



「海人」前シテ



「海人」後シテ

塩津  
圭介

塩津圭介

1945 春多流 藤原 淳清人の長男  
1950 「水川」の子方で初舞台。  
1955 「経政」にて初シテ。  
1959 「五世多喜多家宣家宣家宣家宣」のもとへ内弟子修行のため上京。  
1961 「道成寺」を吹き立てる。  
1966 日本能楽会会員。並葉文化財総合指定。  
1970 平成元年即位の礼で「右馬夷」子爵を勅める。  
2000 艺術選奨文部科学大臣賞受賞。  
2005 誕生70周年記念能演賀文賞  
2006 舞臺人生會章受章。  
2007 振能津の會主宰。  
2008 振能津の會主宰。

塩津 哲生

藤原不比等の子、崩前大臣は亡母の追善のため讃岐の国志度のまへ赴きます。そこで一人の海人（シテ）がやつてきました。

海人は、かつて龍神に奪われた名珠を取り返すため子の立身と引き換えに命を懸けて珠を取り戻した海人の話をします。大臣はさき母がその海人であると知り、追慕の念を募らせ涙を流します。

従者は珠を取り返す場面を真似て見せるよう所望し、海人は仕方話で再現します（玉之段）。珠を取り戻し命果てるまでを語り終えた海人は、自分こそがその海人であり母の幽霊であると告げ、その証として大臣に文を託し海中へ消えていきます。

大臣が母からの手紙を見ると、死して後十三年、誰も自分を弔う者はない、孝心があるならばこの闇から救つて欲しい、と綴られていました。大臣は法華経を誦誦し十三回忌の法要を営みます。この弔いに

〔休憩二十分〕

狂言  
子盜人

シテ(博奕打) 野村 万禄

アド(主人) 吉良 博靖 謹

舞離子	歌占	塩津	哲生
太鼓	小鼓	白坂	飯田
笛	笛	保行	清一
笛	笛	相原	大島
佐々木多門	狩野	成信	内田
一彦	輝久	一彦	大島

すじら  
子盜人

こぬすびと

金策尽きた博奕打は、裕福な家へ狙いをつけて盗みに入ります。ようよう忍び入ったその一室には、あどけない幼子が寝かされていて……。いつの世も変わらない、人間の微笑ましい姿が魅力の狂言です。

藤原不比等の子、房前大臣は亡母の追善のため讃岐の国志度の浦へ赴きます。そこ」一人の海人（シテ）がやつてきました。  
海人は、かつて龍神に奪われた名珠を取り返すため子の立身と引き換えに命を懸けて珠を取り戻した海人の話をします。大臣は亡き母がその海人であると知り、追慕の念を募りせ涙を流します。  
従者は珠を取り返す場面を真似て見せるよう所望し、海人は仕方話で再現します（玉之段）。珠を取り戻し命果てるまでを語り終えた海人は、自分こそがその海人であり母の幽霊であると告げ、その証として大臣に文を託し海中に消えていきます。  
大臣が母からの手紙を見ると、死して後十三年、誰も自分を弔う者はない、孝心があるならばこの闇から救つて欲しい、と綴られていました。大臣は法華経を誦誦し十三回忌の法要を営みます。この弔いに